

見る 知る ミルシル

じぶんの「まち」を



この地に残る

数々の伝説を

後世に

伝えていきたい

民話の魅力、語り部の力

ざわざわと話し声のあふれる空間に、マイクで拡張された司会の声を通った。隣同士のおしゃべりに夢中になっていたお客さんたちが、皆、口をとじて注目をする。ここは、上柏崎地区にある常設型の居場所、コミュニティ・ケア「けやき館」。今日は、たかねざわ民話の会による「語りの会」だ。毎月、第三木曜日の午後に開催されている。司会からの紹介を受けて、語り部の岡田さんが、すつと立ち上がった。「始まる前の数分間が、一番緊張するの」直前に、ちらちらと時計を見やりながら、こっそりと教えてくれた彼女。今は、ずらりと並ぶお客さんたちを見渡して、にこりと微笑んでいる。やまぶき色の作務衣に身を包み、方言を使った柔らかな口調で、ゆつたりと語りはじめた。

民話語りには、台本が無い。昔話は、人から人へと、口伝で語り継がれてきた。語るそばから消えていくものだ。けれど、そんな語りを文字に書き起こしたもののや、歴史資料などが、目に見える形として残っている。語り部たちは、それらの資料を

もとに、伝説、伝承を掘り下げる。先人たちが後の世に伝えようとしたものは何かを考え、膨大な資料の中から言葉足额したり引いたりして、自分だけの語りを作り上げる。〈再話〉と呼ばれるその作業は、一つの話を語ろうとする度に、何度も何度も繰り返される。「語りは、数人が同じお話をしても、違ったものになるんですよ。声や間の取り方などによって、語る人それぞれのお話になり、味わいを深めるんです」と岡田さんは言う。

一話目の語りが終わわり、会場に笑い声と拍手が起る。今日、岡田さんが語った「みようが宿」は欲張りな夫婦の失敗談なのだが、軽妙な言葉づかいと優しい声色によって、なんとも憎めない、愛らしい物語となった。続いて、本日二人目の語り部である黒須さんの語りが始まる。

伝説「雪姫塚」は、平田地区、井沼川沿いの話である。わが町にも、数多くの伝説が残っている。たかねざわ民話の会は、今年六月、町内に伝わる伝説を再話し、『語り部が方言で書いた高根沢の民話』を出版した。会が発足して二十八年、会員たちは

(裏面につづく)

小学校や高齢者施設、町文化祭などで語りの会を開いてきた。皆、この地に残る民話や伝承を衰退させたくないという共通の想いを持っている。今回出版された本には、会員たちが自らの足で町内の伝説の地を訪ね、資料を調べ、物語四十話を再話した。会員の小池さんは、会についてこう話す。「私はこの会が結成されたときから、先輩と仲間たちで活動してきましたから、次の人たちにつなげていくことが大事だとずっと思っていました。本を出せたこと、これは一番嬉しいことです。そのうえ、会に新しい方が入って、無事にバトンタッチができています。とくに、とても安心しています」



伝説「みょうが宿」を語る様子

二話目の語りが終わると、別の会員たちが代わる代わる、方言クイズや童謡などでお客さんたちと一緒に楽しんだ。あと二つのお話を聞いたなら、本日の語りの会は終わってしまう。会員たちの中には、幼い頃、祖父母が実際に語ってくれた昔話の経験が元となって、民話語りを始めたという者が少なくない。「昔、たばこ農家の人は、忙しい時期になると子どもまで一緒になって仕事をしたの。夜にはおばあちゃんと向かい合って、へたばこ伸し〜といったね、干したたばこの葉っぱを伸ばして広げる作業をした。子どもだから、夜は眠たかったけれど、手を動かしながら、おばあちゃんが昔話を語っ



方言クイズ 〈べだっちい〉とはどんな意味でしょう？

◆◆◆ 今回の取材先 ◆◆◆

たかねざわ民話の会

〈定例会〉毎月第2土曜日 10時～

※場所は都度変わるため要確認

〈連絡先〉大嶋 洋子 028-676-1999

元気の秘訣



好きなことや趣味を人に打ち明けよう。共通の「好き」が仲間を呼び寄せる！



物語を聴こう。耳に入る音声から場面を想像すると、脳の前頭葉が刺激される！

てくれるの。それが面白くって、楽しくって、大好きな時間だった」そう教えてくれたのは、会員の石川さんだ。遠い昔を懐かしむように話す。そんな石川さんと同じ瞳を、今、会場のお客さんたちは語り部に向けている。

全ての語りが終了すると、長い長い拍手が続いた。感想を口にする人、余韻に浸る人。その誰もが、柔らかく、ほぐれた顔をしている。昔々の、民話語り。それを、どこか優しく、懐かしく、ずっと親しんできたものの一つのように、こちらへ手渡してくれる。それが、語り部の力なのだろう。

【文・編集・小池千秋】

